

THE NEW LINGUISTIC ATLAS OF TOKYO AND SPOKEN JAPANESE LANGUAGE

「東京都・首都圏方言の実態」— 移りゆく日本語の話しことば—

*Mariko Kuno*¹

Abstract: Population of Tokyo has been increasing as well as the transportation system, and residents are overflowing to the Grand Tokyo metropolitan area. Language is also changing from Tokyo dialect to the Grand Tokyo metropolitan dialect. The New Linguistic Atlas of Tokyo has been edited mainly by Mariko Kuno and her students, and, so far, Phonology edition, Accent edition, and Grammar edition are completed and published. The discussion will be main features of phonology, accent, and grammar of Tokyo dialect, comparing older generation and younger generation, based on these Atlases. The older generation maintain the traditional stratum but the younger generation lost large part of the old stratum. The old generation of Tokyo keeps some grammatical phenomenon unique to Kanto dialect and younger generation keeps a part of it.

Keyword: Tokyo dialect. Dialect of Greater Tokyo metropolitan area. The New Linguistic Atlas of Tokyo, Spoken Japanese.

要旨: 日本の標準的口語の基盤は東京方言の山の手のことばである。東京の人口は、交通システムの発達とともに増加し続けてきており、住民は東京から首都圏地域へとあふれ出ている。『新東京都言語地図』は久野マリ子を中心に編纂して、これまでに『音韻編』『アクセント編』『文法編』が完成し出版されている。これらの言語地図にもとづいて東京方言の音韻、アクセント、文法の特徴について老年層と青年層を比較しつつ議論する。その結果、結果、老年層は伝統的な層を保っているが若年層は古い層の大半の部分を失っていることが分かった。東京の老年層は関東方言だけにあるいくつかの文法現象を保っていて、若年層もその一部を保持している。

キーワード: 東京方言、首都圏方言、新東京都言語地図、日本語の話しことば

1 はじめに

ふるさとの訛り懐かし停車場（ていしゃば）の 人混みの中に そを聞きにゆく
『一握の砂』1910年（明治43年）。

1 國學院大學名誉教授、國學院大学大学院客員教授. kuno@kokugakuin.ac.jp ORCID id: <https://orcid.org/0000-0003-0563-8065>

これは、明治の詩人石川啄木の歌で、教科書にも採択された有名な歌である。ドナルドキーン氏をして、「現代人」と言わしめた啄木は、東京へ上京後、生活苦の中で現代人の琴線に触れる多くの歌を作り27歳の若さで没した。故郷の訛りが聞こえる上野駅に方言を聞きに行くという、この歌は東京に働きにきた多くの地方出身者から大きな共感を持って迎えられた。

地方出身の話者にとって自分の方言には二つの側面がある。かけがえのない故郷への愛着と方言コンプレックスとである。「お国訛りは国の手形」といわれるように、方言研究は、近代では地域の文化・特色を継承する「国の手形」として研究された。現代では日本語諸方言の地域差を追求する地域方言研究と、社会方言学が盛んである。

方言体系の記述と言語生活の解明が目的で、現代日本語研究の基礎研究あるといっても良い。この成果を用いて、体系の比較による方言の歴史の解明ができる。方言研究の研究対象は幅広く、本国際学会のテーマの一つである対照研究もその視野に入っている。音韻・文法・語彙という伝統的な言語研究の他、類型論なども含まれる。各地方言には言語生活に密着した豊かな表現がある。秋田方言で「ジュップガシル」という動詞は、郷里の祖父母が夏休みに都会から遊びに来た孫が帰ったあとの「ホッとする気持ち」を表す動詞である。多彩なオノマトペや、話題の展開や表現方法や発想法に至るまで地域差があり、談話分析や言語行動分析はこれから期待される分野となる。

現代日本語の話しことばは、共通語（標準語）である。共通語の基盤となったのは東京の山の手の教養ある層の東京方言を基盤とし、日本全体に通じることばである。

「話しことば」と「書きことば」という枠組みからみれば、共通語は話しことばの中では最も書きことばに近く文字で書き表せる。一方、方言は文字で書ききれない幅広い事象を含む。東京方言の話し手である国語学者亀井孝一橋名誉教授（1912年－1995年）から伺った話であるが、東京で大根おろしを「大根おろし」と書く。「デーコンオロシ」までは書けるが、「デーコロシ」とは実際に発音していても書くことはないという。東京方言は書きことばに近い話しことばから文字では書ききれない話しことばまでを含む。つまり、大根おろしは、共通語では「大根おろし」、東京方言ではダイコンオロシ、デーコンオロシ、デーコロシである。

共通語に対する東京方言の役割は、東京が地域を拡大し人口を増加し続けているため、圧倒的多数の移住者のことばである首都圏方言にかわりつつある。

2 共通語、東京方言、首都圏方言の違い

かつて日系1世の方々ブラジルに移住された頃の日本では方言差がもっと明確であった。この方言差をこえて理解し合えるための手段が共通語であった。以前サンパウロ大学日本文化研究所客員研究員としてお世話になったとき、多くの1世の方々にインタビューを試みた。そのときの話者の方々の日本語が教科書通りの折り目正しい日本語であったのが強く印象に残っている。80代の鳥取県出身の男性が、一人称に「僕」を用い、国語の教科書にあるような端正な「です、ます」体で答えてくださっ

た。アクセントや音韻は出身地方言の特徴が残っていたが、文字で表記すると共通語そのものであった。

沖縄離島調査でも、話者は調査者には共通語（ウチナーヤマトグチ）で答え、その場にいる島の人同士はシマコトバで話すという使い分けの場面に遭遇した。伝統方言と共通語の関係は、公の場では共通語、それ以外の場面で伝統方言という使い分けの基本が観察される。

たまたま東京方言は公の場の話し方が共通語と近いので、場面差と文体差の使い分けの境界が曖昧である。東京方言の後を継いだ首都圏方言でも公の場では共通語、それ以外の場面や文体では首都圏方言の使い分けがみられる。

共通語、東京方言、首都圏方言について、①それが用いられる場所、②話し手、③使う場面、④使用例、⑤その他の特徴に分けて検討する。

2.1.1 共通語

①日本全国／②日本語の話者／③公の場。ごく私的な場の会話や罵詈雑言などは使いにくい／④NHKのニュースのことば、国語教科書の会話、全国から人が集まる場所や職場（大学や病院）。演説。訓示。学会の口頭発表。⑤学校で学習する。学習しなければ、日記や手紙、公の場での正式な話し方は使いこなせない。言語的特徴としては、規則的で例外を排除する。複数の形態素を組み合わせて表現する、例えば、「来れる」は東京方言、共通語は「来る・ことが・できる」。

2.1.2 東京方言

①東京／②35区時代の東京で言語形成期を終えた人。／③公の場では共通語。それ以外では東京方言。／④日常の言語生活全般。どのような場面、思想・感情でも表現できる「生活語」／⑤規範外の表現や、複雑な内容を短い形式で表す語句がある。例えば、カタス（かたづける）、オッコッチャッタ（落としてしまった）、ナンツッタツテ（何と言ったとしても）」は東京方言。五段活用の「行く」の可能動詞は「行ける」が共通語。「行カレル」は東京方言。

2.1.3 首都圏方言

①首都圏（東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県やその他の通勤・通学範囲）／②首都圏に住む人。言語形成期による制約は緩やか／③公の場では共通語。それ以外では首都圏方言／④東京方言と同じく「生活語」。／⑤新しい言い方に寛容。規範外の表現を許容する。若者ことばや新方言も含まれる。例えば、「コクル（相手に好きだと伝える）、～ジャン（ではないか）、ウザイ（うっとうしい、面倒だ）は首都圏方言。「タツテモラッテ イーデスカ」は首都圏方言。「立って頂けますか、立って下さい」は共通語。

2.3 首都圏方言の問題点

東京方言は圧倒的に多数の移住者のことばの首都圏方言にかわり、首都圏方言は、生活語としての側面を備えた共通語の生活語の位置を占めることが予測される。首都圏方言に注目すべき点は、SNS、漫画、インターネットなどの新しい伝達手段の発達にともなって首都圏方言が全国に広まっていることである。共通語は生活語として不十分なので、首都圏方言は生活語としての共通語と意識されるようになってきている。例えば、共通語では、現在でも表現にばらつきがある。自分の妻や夫を人前で何というかが曖昧で、「あなたの夫、あるいは妻」「わたしの夫、あるいは妻」は、共通語のツマ、オットより、首都圏方言のヨメ、ダンナがよく使われる。

2.3.1 漫画『海街diary』にみる首都圏方言と共通語

首都圏方言の実際の会話使用例として漫画を例に首都圏方言と共通語の使い分けを示す。『海街diary』は成人男女性向けの漫画。第11回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞、マンガ大賞2013受賞。この他、2015年に実写映画が公開され、2017年に舞台化され話題になった。この漫画を選定した理由は、舞台は現代の鎌倉。東京ではないが首都圏。様々な職種、幅広い年代の人物が登場する。作者は東京の成育の人で、首都圏方言の話し手。この漫画の中で、登場人物が場面や立場によって共通語と首都圏方言を使い分ける例が見られる。

① 社会人女性3人の会話の例『海街diary 4』吉田秋生著 小学館 2011年8月

登場人物は3人の若い女性。

十和子(とわこ) : 35歳くらい。幸と佳乃の離婚した父親の再婚相手の妹。最近知り合った。職業は雑誌の編集者。この場面では共通語。金沢出身。

幸(さち) : 32歳くらい。佳乃の姉で4人姉妹の長女。看護師長。職業柄共通語。内言で相手の言動に感想を表明するときは首都圏方言。両親の離婚後親代わりで妹の面倒を見るという役割設定で家庭内でも若者ことばは使わない。鎌倉出身。

佳乃(よしの) : 25歳くらい。幸の妹で次女。地元の信用金庫で働く。言いたいことを遠慮なく言うという設定。営業では共通語。家や職場での内言で相手の言動に感想を表明するときは首都圏方言の若者ことば。鎌倉出身。

初対面の3人の会話は「です、ます体」共通語。

例1 - どういうお仕事なんですか (幸から 十和子へ)

この発言に対して幸と佳乃の内言に首都圏方言が現れる。どちらも同じ意味であるが、相手进行评估する内言では二人の終助詞が異なる。

例2 佳乃の内言 - まさか 金がらみじゃないよね
そんな そそっかしくちゃ つとまんないよ

例3 幸の内言 - まさか ナースじゃないわよね
そんな そそっかしくちゃ つとまんないし

② 中学生男子と社会人で知人男性との会話 『海街diary 6』吉田秋生著 小学館 2014年7月

登場人物は、中学1年生の男子と彼と親しい社会人。

風太(ふうた)：中学1年。地元少年サッカークラブのキャプテン。鎌倉出身。

スポーツ店の店長：35歳くらい。風太の所属するサッカークラブのスポンサーで親しい。出身は鎌倉ではない。

風太が店長相手に話す時、初めは丁寧な文体「～です、ます」の共通語。

例4 風太 一軽はずみなことなんかしないって信じてます(風太から店長へ)

しかし、自分の気持ちを説明的に述べる場面は首都圏方言の若者ことば。中学生男子らしい話し方である。終助詞がない、ラ行が撥音化、促音化する、。連母音アイの融合がある、俗語も使用するという特徴がある。

例5 風太 ーただ どうしても じっと してらんなくて

例6 風太 ーおせっかい すんなって いわれっかも しんないし

例7 風太 ー自己満足じゃねえかって 思ったりも すっけど

例8 風太 ーでも やっぱ

別れ際の挨拶は、丁寧な文体の共通語の変わる。

例9 風太 ーもう少し さがしてみます

例10 風太 ーおじゃましました

方言には、年代差、個人差、使用場面差、文体差、場面による使い分けがある。日本語話者の読者にとっては自然な使い分けだが、この例でも様々な文体を使い分けていることがわかる。

3 『新東京都言語地図』から見た東京のことば

前述通り、現代日本語の口語は、書きことばに近い共通語が基礎である。共通語の基盤で、首都圏方言のもととなった東京方言の実態はどうなっているだろうか。『新東京都言語地図』は、東京都に特化した実態調査研究である。これまで東京都全域の実態調査は研究成果が少なく、実態と年代差を明らかにできる研究である。

『新東京都言語地図ー平成初期の東京のことばー』(2018, 2019)は、都市化による言語変容の解明に貢献できる。都市化した方言は急激な人口増加と地域の拡大によって、伝統方言の東京方言は生え抜きの話者の比率が少なくなり、東京の中心的な言語になれない。東京都の住民の多くは地方出身者で、住民が江戸語を継承した伝統的東京方言が話せない。東京への移住者である地方出身者の2世、3世は1世が話した地方方言を継承せず、1世が話す共通語を基盤とした生活語を話す。そのことばは共通語でも東京方言でもない。この状態は日系2世、3世の日本語と似た状況である。

3.1.1 『新東京都言語地図』成立の経緯

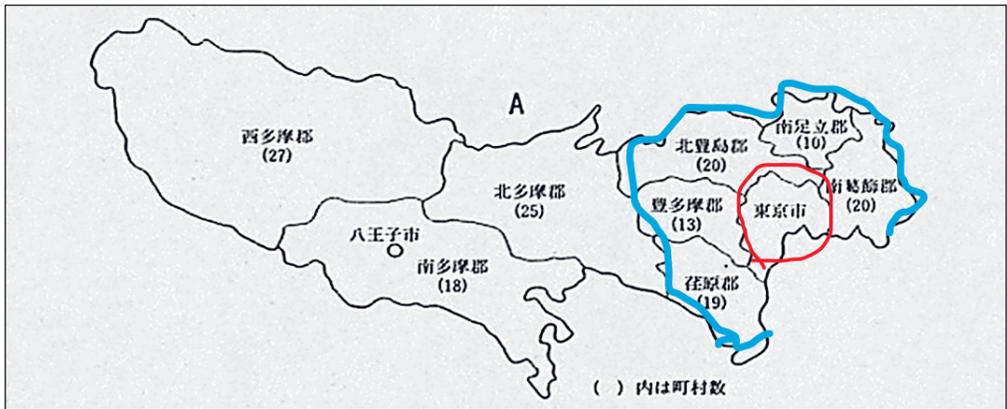
『新東京都言語地図』は大島一郎東京都立大学名誉教授の研究から始まる。大島一郎先生による『東京都言語地図』(1986年<昭和61年>東京都教育委員会)が刊行され、その補完を目的として項目と地点数を補って1989年に出発した。東京都立大学大学院、東京都立大学退官後、神田外語大大学院、その後東京言語調査研究

会で研究を継続したが完成にいたらず、久野マリ子が研究会を引き継ぎ、國學院大學大学院久野研究室の院生諸君らと言語地図作成を続け、音韻・アクセントの地図集を刊行した。文法、語彙編の地図を準備している。

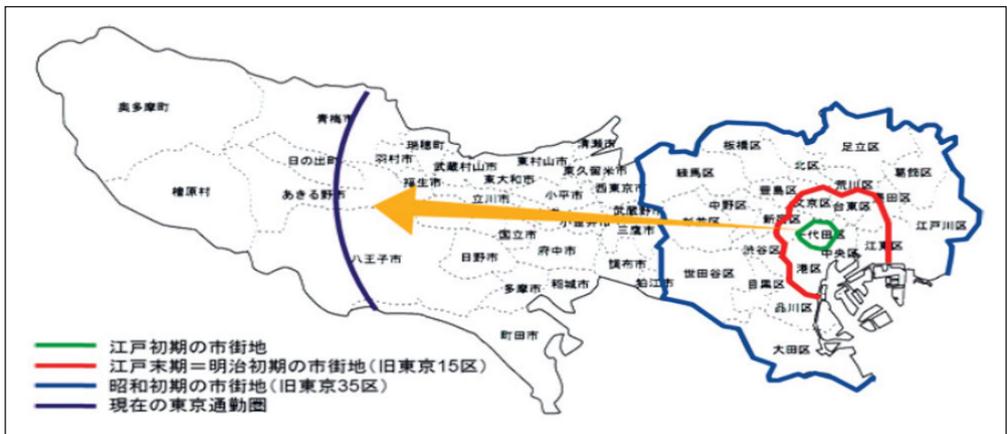
3.1.2 東京の地域と人口の変化

東京のこばを理解するために東京の地理と人口の変化の理解が必要である。

江戸時代から、江戸は歴史の中心として発達して、東京になってからは日本の首都として地域が拡大し、人口が増えた。戦後は地域も拡がり人口が増え、交通手段の発達によって近郊近在からの移動が盛んになった。



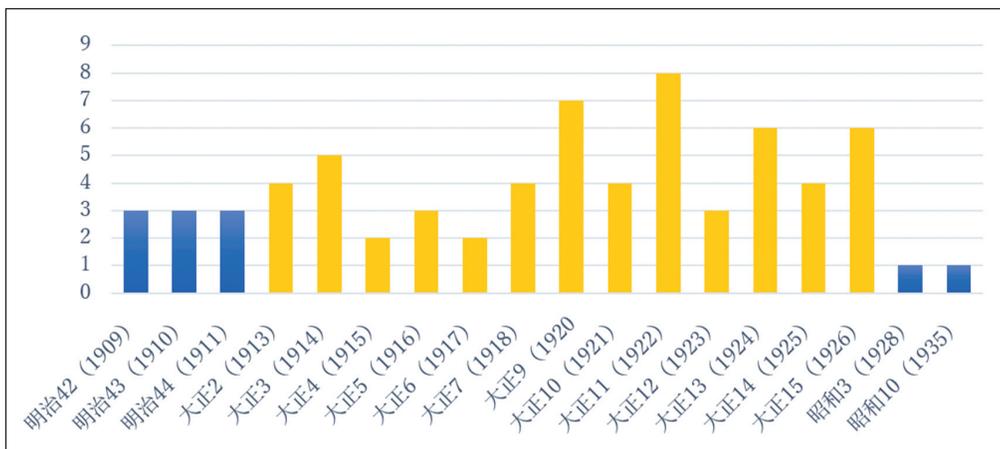
地図1 昭和7年（1932）東京市域拡張直前の東京府、新東京都言語地図の高年層の言語形成期頃の東京の地図



地図2 江戸→東京市→15区→35区→東京の範囲と通勤圏

地図1によれば、江戸、旧東京15区から知られるように、江戸の範囲はごく狭かった。1932年（昭和7年）に35区時代の東京府の地図を見ると、東京市は旧35区より狭く、35区は現在の23区よりも狭い。地図2で、その後、鉄道網が整備され、通勤・通学圏は急速に拡大することを示した。

グラフ1で話者の生まれた年を示した。『新東京都言語地図』の高年層話者は1912年～1926年の大正生まれが中心で、東京が35区時代の東京が言語形成期である。この世代の話者は、第二次世界大戦前に言語形成期を終えているので学童疎開による共通語化は経験していない。オレンジ色が大正生まれの話者。



グラフ1 新東京都言語地図話者老年層 生年一覧

青年層は1973年（昭和48年）前後の生まれで高度経済成長期の頃である。現在の東京都になった時期に言語形成期を過ごしている（グラフ省く）。

ここで注意すべきは、高年層・青年層ともに調査時の設定である。現在では高年層の話者は90歳以上で亡くなった方も多し。青年層の話者はほとんど50歳前後になっている。ことば通りの意味での青年層ではない。『新東京都言語地図』の高年層は、現在の高年層より一世代前の東京の相を反映している。

『新東京都言語地図』の資料は、話者選定の条件が厳密なことに特徴がある。選定条件は、言語形成期がその調査地点であること。外住歴が少ないこと。両親またはそのどちらか一方の成育者がその地点の出身者であること、調査時年齢は、高年齢層は60歳～65歳の男性。青年層は、調査時年齢が18歳～23歳の男性である。話者が男性であるのは、『日本言語地図』（LAJ）の話者条件に合わせている。当時は男性の方がその土地を移動しないことが多かったからである。調査は一对一の面接調査で調査場面は録音をとっている。

本資料が、いつ、どこで、誰を、誰がどんな調査をしたかが明確は資料であることは特筆できる。音声言語である方言は、ひとたび話し手が失われるとその復元はほぼ不可能であり、その点でも貴重な記録である。

調査のねらいは、東京都下の方言実態を明らかにし、江戸語・東京語がどの程度残っているかを明らかにする。また、東京都のことばの特徴、年代差、地域差、新しい変化（首都圏方言化）を探ることを目的にしている。

3.2 音声変化をさぐる調査

① 江戸語の名残、東京方言の特徴を調査する。1) 連母音の融合、ai、ae、ie、ui、oi、oe。2) 直音化。② 外来語音の移入「ティ、ディ、ファ、フィ、フェ、フォ」③ ラ行の撥音化や促音化。『海街diary』にあるように青年層で増えている。ヒとシの混同、ガ行鼻濁音、母音の無声化、助詞の融合。

3.2.1 音韻の分布まとめ

高年層で伝統的な音声特徴が残っているが、青年層では減少している。一般的に青年層では共通語化が進んでいるが、条件によっては伝統的方言形式の残存や増加が見られる。次に地図の説明をする。

(1) 連母音アイの融合

凡例の右枠にある数字は回答を得た地点総数。アクセント分布図にある「無」は、無アクセントを表す。

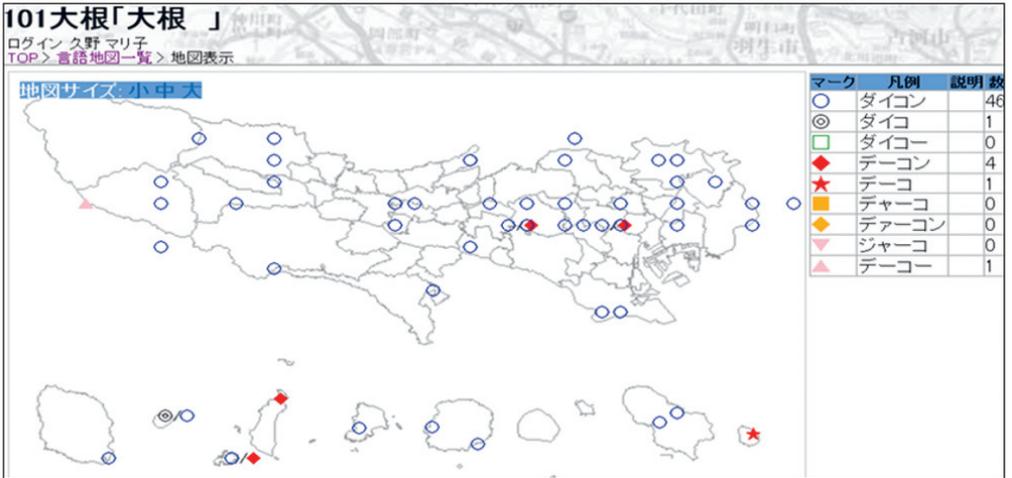


言語地図1「大根」高年層

大根（だいこん）は連母音アイの融合の実態を探る地図である。連母音アイの融合は、江戸語、東京方言の下町言葉として有名で、アイが融合した形式でがダイコンがデーコンになる。高年層では全域にわたって融合形が分布する。

青年層では、共通語のダイコンが優勢で、デーコンは激減する。

この地図では、連母音アイの融合は青年層で共通語化して失われたように見える。しかし現実の言語運用場面では『海街diary』の中学生の少年の発言にあるように、首都圏方言の若者ことばでは「知ンネー（知らない）」、「イテー（痛い）」のようにアイが融合した形式が多く現れる。



言語地図2「大根」青年層

3.2.2 講演では説明を省略した地図

(3) 直音化現象は東京方言で勢力のあった現象である。直音化とは口蓋化した音が口蓋化を失う現象である。ポルトガル語で、リオデジャネイロで「ボア ノイテ」がサンパウロで「ボア ノイチ」になるのは口蓋化の現象である。

「新宿」を高年層では直音化したシンジクが東京都下全域に優勢で広く分布する。「青年層」ではシンジクが劣勢であるが東京の中心部にも確認できる。東京方言の特徴を受け継ぐ現象でまだ勢力を保っている。

(3) 時間の「10分」は、高年層は東京都全域でジッポンが優勢である。歴史仮名遣いに合った正しい発音である。青年層ではジュッポンが優勢になる。過剰矯正 (Hypercorrection) の例。NHKのアクセント辞典でもジュッポン・ジッポンが認められている。伝統の漢字音の読みが失われている。

3.3 アクセント変化をさぐる調査

年代差、地域差、新しい型の出現と消えた型の確認がねらいである。さらに従来の研究成果と東京方言の比較研究が行える。

3.3.1 アクセント分布のまとめ

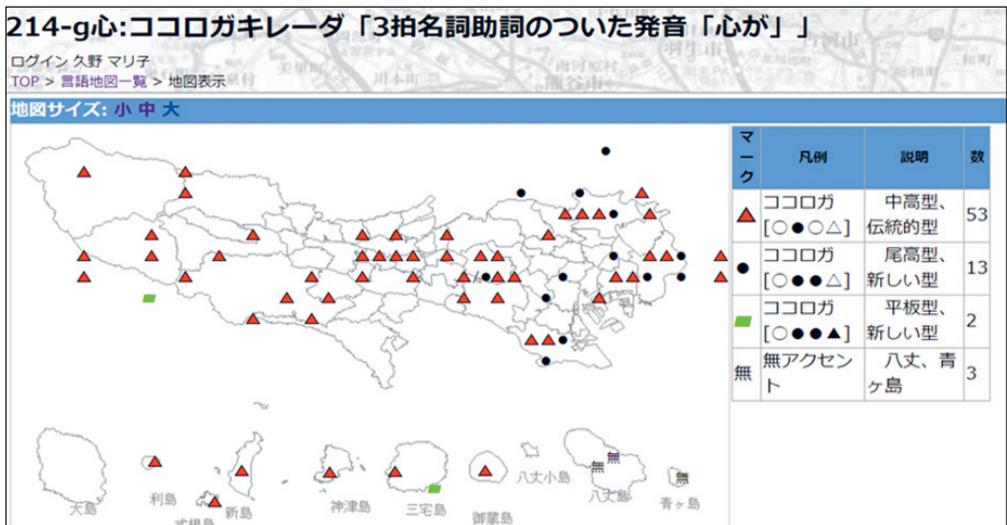
アクセント体系は安定してn+1の型の対立がある。東京アクセントには安定した部分と、ゆれが多い部分とがある。地図は省略したが、絵が上手だの「絵が」、箸がないの「箸が」は高年層、青年層ともに例外はほとんどない。3拍語以上に拍数が増えると年代差、地域差がみえる。今回の調査で、アクセント辞典に掲載されていない型が東京都全域で優勢な語もあった。また、高年層で伝統アクセントの型が優勢でも青年層では共通語化アクセントが広がることを確認できた。

アクセント辞典との表記のゆれの原因の一つに、アクセント辞典に採録された型は東京市旧15区の限られた話者に限定されていたことがあげられる。『新東京都言語地図』では、東京都全域で調査しているから、東京都内での地域差や語毎の差が目立つ。

日本語学習者にとってアクセントの型の揺れは不安であるが、学習するのは共通語であるから、学習の際にはアクセント辞典の型がふさわしい。

3.3.2

(1) 「心がきれいだ」の「心」のアクセント



言語地図3 心がきれいだの「心」のアクセント 高年層

214-g心:ココロガキレーダ「3拍名詞助詞のついた発音「心が」

ログイン 久野 マリ子
 TOP > 言語地図一覧 > 地図表示

地図サイズ: 小 中 大



言語地図4 心がきれいだの「心が」のアクセント 青年層

高年層では中高型ココ]ロガ が優勢で全域に広がる。東京都内と隣接する埼玉県にも中高型ココ]ロガが確認される。青年層では、高年層で都内東南部

していた、尾高型のココ]ロガ が優勢になる。東部の一部にあったアクセントの型が東京全域に広がっている。

3.3.3 講演では省いた地図について

(2) 椿が咲いたの「椿が」のアクセント。高年層では、頭高型ツ]バキガ が優勢。周辺部に尾高型ツバキ]ガ、平板型ツバキガ、中高型ツバ]キガの変種が分布する。青年層では全域に頭高型ツ]バキガが広がり優勢である。東京都周辺地区や文献では中高型が古い型で、共通語アクセントが全域に広がっている。

(3) 4拍以上の語では多くの型の変種が現れて個人差が大きくなる。「止まり木がある」の「止まり木が」は、高年層は平板型トマリギガ が優勢である。『新明解アクセント辞典』では中高型トマリ]ギガか、尾高型トマリギ]ガが採録され、平板型はない。青年層でも全域で平板型が優勢である。アクセント辞典にない型が優勢である例である。4拍以上の多拍語になると複合語のアクセント規則が適用され、各地でアクセント辞典と同じ型が現れないと解釈される。

3.3.4 先行研究のアクセントとの比較検討

(4) 「頭」のアクセント

212-g頭:アタマガイタイ「頭が」助詞の付いたアクセント

ログイン 久野 マリ子
TOP > 言語地図一覧 > 地図表示



言語地図5 「頭が」のアクセント 高年層 尾高型が優勢

「頭」のアクセントは伝統方言や先行研究で優勢な型が、青年層では新しい型似変化しつつある例である。

『新東京都言語地図』では高年層では尾高型が優勢。都内に2地点中高型が確認されるが少数である。すでに『明解アクセント辞典』(1958)に注記がある。

青年層では中心部だけでなく、23区、多摩地区の都内各地に中高型が広がる。現在では、首都圏方言として「頭」の中高型のアクセントが優勢となっている。

212-g頭:アタマガイタイ「頭が」助詞の付いたアクセント

ログイン 久野 マリ子
TOP > 言語地図一覧 > 地図表示



言語地図6 「頭が」のアクセント 青年層 都内の中高型が広まる

先行文献のでは尾高型アタマ]ガ が優勢である。全国のアクセントを記録した『現代日本語方言大辞典』でも関東地方全域で尾高型が優勢である。

他の「アクセント辞典を」を見ると、山田美妙(1892)『日本大辞書』第三上(尾高型)。日本放送協会編(1951)『日本語アクセント辞典』アタマ 尾高型。金田一春彦監修(1958)『明解日本語アクセント辞典』初版ア[タマ]尾高型,《地域的にア[タ]マ中大型》。平山輝男編(1960)『全国アクセント辞典』ア[タマ]ガ尾高型。秋永一枝編(1981)『明解日本語アクセント辞典』第二版ア[タマ]尾高型,《地域的にア[タ]マ中大型》。東京都教育委員会(1986)『東京都言語地図』老年層:アタマ]ガ尾高型、青年層:ア[タマ]ガ尾高型・ア[タ]マガ中大型。平山輝男ほか編(1992-1994)『現代日本語方言大辞典』東京・奥多摩 アタマ]尾高型。NHK放送文化研究所編(1998)『NHK日本語発音アクセント辞典』ア[タマ]尾高型、(ア[タ]マ中大型)。秋永一枝(2014)『新明解日本語アクセント辞典』ア[タマ]尾高型,《地域的にア[タ]マ中大型》となっている。

『明解日本語アクセント辞典』に早くから中大型アタ]マの注記があることから、東京中心部で中大型が劣勢ながらあったことが分かる。東京中心部以外の地域では尾高型が優勢であるが、東京都内では中大型が急速に広がっている。

3.4 文法変化をさぐる調査

文法は、伝統的な東京方言の文法事象がどの程度残っているかを探る。高年層で伝統的形式が残り青年層で共通語化形式が広がっている。

音韻・アクセントでは地理的分布が確認できなかったが、文法形式には、旧東京15区・東京市35区と、それ以外の東京都という分布が見えるのが特徴である。

3.4.1 カ行変格各活用的一段活用化

(1)「来る」は「する」と並んで日本語では数少ない不規則変化をする動詞である。カ行変格活用の活用に一段活用の形式が現れる。これを一段化と言う。

『方言文法全国地図』略称GAJ (1989-2006)によれば、一段活用の動詞と同じような活用形が現れるこの現象は、日本では関東方言だけに確認される。

『新東京都言語地図』に現れた一段化の例は、共通語では「こない、きやしない、くれば、くることができる」が『新東京都言語地図』では、「キナイ、コヤシナイ、キレバ、コレル・キレル」である。

地図は省略する。「来ない」の分布図では、高年層に一段活用したキナイが東京都全域に広がるが、15区の東京中心部には少ない。青年層ではキナイは2地点だけで共通語化している。「来れば」では高年層でもキレバは少ない。「来ることができる」は高年層にキレルが点在するが、青年層ではキレルは確認されない。

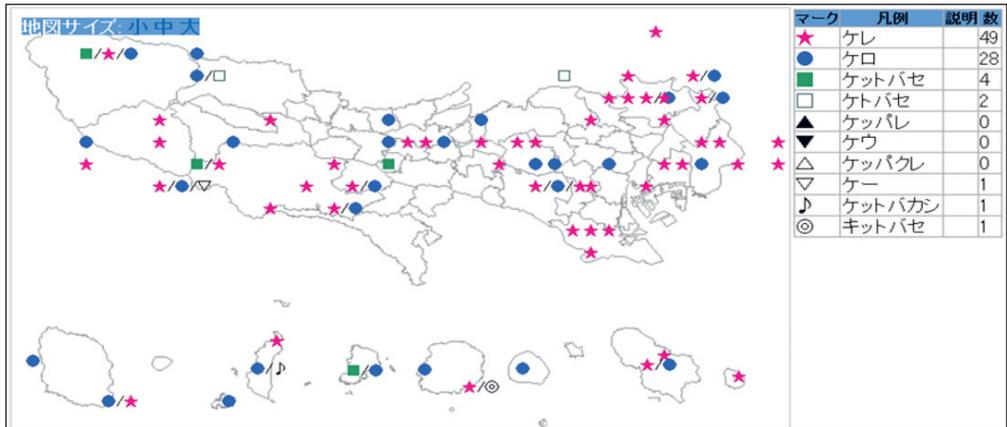
「来やしない」は高年層にキヤシナイが優勢で、次にコヤシナイも優勢。ともに東京都全域に広がる。東京15区ではコヤシナイが単独で現れる地点があり「キヤシナイ」はない。コヤシナイはGAJでは東京では確認されない。青年層ではキヤシナイが優勢だが、周辺には劣勢ながら分布する。

「来られたでは、」高年層にキラレルが全域に広がる。「来られる」と「着られる」と同じ形式になる。青年層では確認されず共通語化が進んでいる。

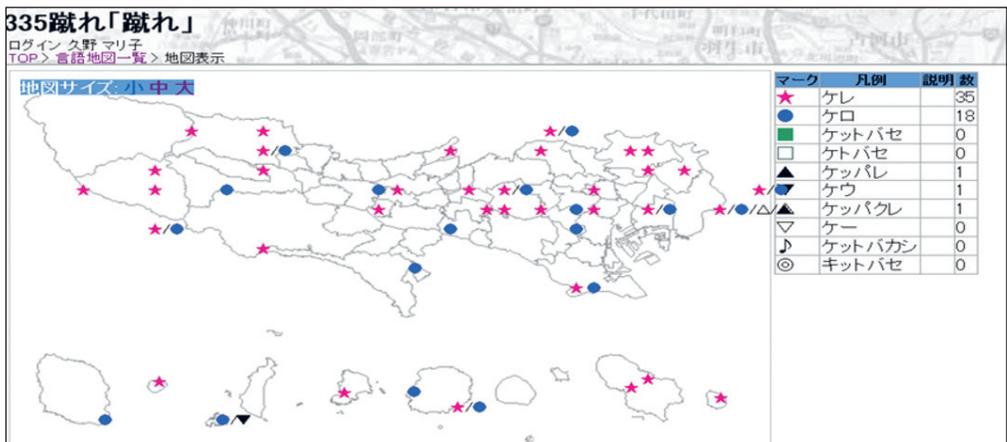
3.4.2 (2) 「蹴る」の命令形

一段活用動詞命令形の語尾はーレで、例えば「受けろ」のようである。しかし「蹴る」ではーロ（ケロ）が現れる。国語辞書によると「下一段活用動詞の「蹴る」は、江戸時代後半から四段活用に活用するようになる。現代でも「け散らす」「け飛ばす」などの複合語に下一段活用の名残がある…」とある。

共通語では「蹴る」は五段活用であるから、共通語ではケレである。ところが、高年層に「ケロ」がかなりの勢力で分布する。分布域が旧35区だ



言語地図7 「蹴る」の命令形 高年層

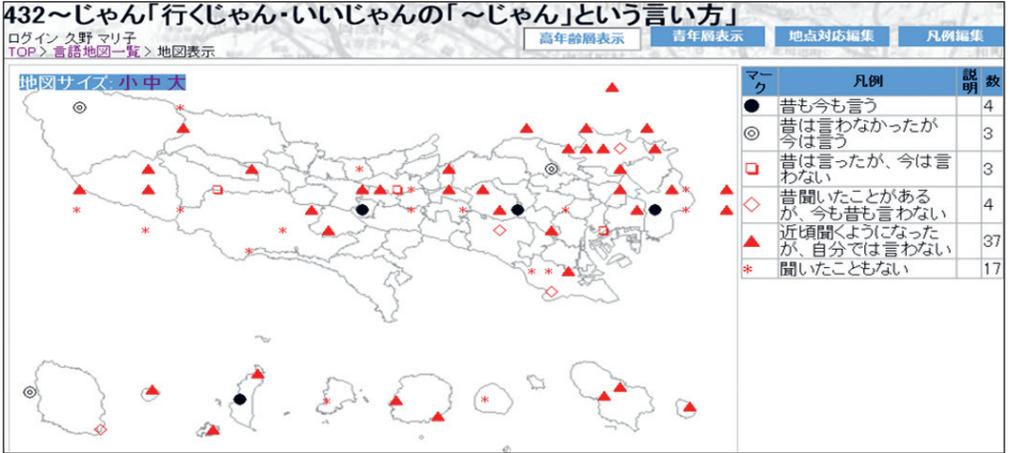


言語地図8 「蹴る」の命令形 青年層

けではなく15区の地点でもケロが分布している。東京都内では青年層でも「ケロ」が勢力がある。東京都では命令形に下一段活用の形式「ケロ」が残っている。江戸語

を継承する東京方言から引き継いだ首都圏方言の例である。東京出身の國學院大學大学院生修士1年の学大学院生は、今でもケレかケロか迷うと証言しており、現在もケロの勢力は根強いと思われる(2021年確認)。

3.5 新しい形式の首都圏方言の例



言語地図9 ～ジャン使用意識 高年齢層

「～ジャン」の言語意識を聞いた項目である。「行くじゃん、いいじゃん」と言いますかという質問に、高年齢層では「近頃聞くようになったが自分では言わない」が一番多く、次に「聞いたこともない」という答えが続く。

高年齢層では「言わない・使わない」という答えが圧倒的に優勢である。



言語地図10 ～ジャン使用意識 青年層

青年層では、「今も昔も言う」が最も多く、次に「昔は言わなかったが今は言う」が多い。「昔は言ったが今は言わない」「近頃聞くようになったが自分では言わない」という回答は、まだ「ジャン」に俗語意識があり、子供なら言うが大学生では言わないという規範意識が働いたと解釈できる。ジャンは首都圏方言だけではなく、全国に広がるようになっている。伝統方言として～ジャンのある神奈川方言では、ジャンの用法には、①「～でしょう」と、②「～ではないか」がある。東京の用法は限定的で「～ではないか」のジャンが用いられる。

4 まとめと今後の展望

『新東京都言語地図』によって、東京都下の方言実態が確認された。首都圏方言には、高年層では東京方言・関東方言の古相が確認され豊かな変種が確認される。青年層でも共通語化は進むが、関東方言の古層が現れることがわかった。首都圏方言への移行が窺える現象がうまれている。

東京都のような大都市方言地域では、一人または少数の話者がその言語集団全体を代表するのは困難であり、従来の調査方法とは異なる手法が必要である。また、方言には男女差、年代差、個人差、使用場面差、多彩な文体差の使い分けがある。東京方言・首都圏方言では、それを巧みに使い分けられているが、言語運用に注目した調査研究が必要である。

参考文献

- 秋永一枝 (1999) 『東京弁アクセントの変容』 笠間書院
- 平山輝男編集代表・秋永一枝編 (2007) 『東京都のことば』 明治書院
- 稲垣滋子 (1992) 「東京方言」 『現代日本語方言大辞典』 1巻 明治書院
- E. コセリウ著・田中克彦訳 (2014) 『言語変化という問題—共時態・通時態・歴史』 岩波文庫
- 大島一郎 (1996) 「東京都の言語実態」 『日本語研究諸領域の視点』 下巻 平山輝男博士米寿記念会編 明治書院
- 加藤正信 (1983) 「東京における年齢別音声調査」 井上史雄編 「<新方言>と<言葉の乱れ>に関する社会言語学的研究」 昭和56・57年度文部科学省科研費総合研究A成果報告書
- 久野マリ子 (2016) 「首都圏方言について考える」、国語研究 (國學院大学国語研究会), 79 pp 1-18.
- 久野マリ子編著 (2018) 『新東京都言語地図 音韻編』 國學院大学大学院久野マリ子研究室
- 久野マリ子 (2018) 「高校生の「全員」「原因」「店員と定員」の発音と意識」 國學院雑誌119-11 pp 149-166
- 久野マリ子編著 (2019) 『新東京都言語地図 アクセント編』 國學院大学大学院久野マリ子研究室

國學院大學日本文化研究所編 (1996)『東京語のゆくえ』東京堂
国立国語研究所 (1989—2006)『全国文法方言地図』財務省印刷局
小林隆・澤村美幸 (2014)『ものの言い方西東』岩波新書
坂本薫 (2020)『神奈川県の方言アクセント』春風社
柴田武監修 馬瀬良雄・佐藤亮一編 (1985)『東京語アクセント資料』絢文社
竹内はるか (2019)『東西アクセント境界地帯方言の変化』おうふう
竹内はるか (2019)「『新東京都言語地図』における4拍名詞のアクセント」『首都圏方言の研究
10号』pp3—12
田中ゆかり (2010)『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
東京都教育委員会 (1986)『東京都言語地図』東京都教育委員会
平山輝男 (1968)『国語の音声』岩崎書店
平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』全9巻 (1992—1994) 明治書院
松村明 (1998)『増補江戸語東京語の研究』東京堂
三樹陽介 (2014)『首都圏方言アクセントの基礎的研究』おうふう

*Recebido em 10 de junho de 2021.
Aprovado em 8 de setembro de 2021.*